

保育効果の検討

本田和子

ここで用いる「保育効果」とは幼稚園保育所などの施設におけるそれを指している。

保育効果の研究は二重の意味をもつものと考えられる。すなわち、その一はそれによって保育者自身が自分たちのおこなっている保育の営みを評価し得るということであり、今一つは社会一般に対して保育効果を認識させ、それによって保育施設の存在価値を啓蒙し得るということである。^①

ところで「効果」という語は、「できばえ・できあがり、ききめ・しるし」などの意味をもっている。^②それ故に、効果の測定とは、ある営みが営みの対象の上に生じさせた「できばえ・できあがりを見る」あるいは「ききめ・しるしを知る」ということになるわけである。

「できばえをみる」といい「ききめをしる」といい、効果は常に価値とはなれがたく結びついている。

そこで、保育効果の測定とは、効果を測定しようとする「対象」

すなわち幼児の上に、幼稚園あるいは保育所などの施設における生活の及ぼす影響を、保育目標という形に顕現されている「価値規準」に照らして観察し、その結果なされる「価値判断」であるといえよう。すなわち、「この幼児に関してこの施設の保育目標がどの程度まで達成されているか」を測定するということになるわけである。

山下俊郎は、保育効果を扱った内外の諸研究を総括し、それに対して次のような考察を加えている。すなわち、まずそれらの諸研究を、「知能の発達に及ぼす影響を測定しているもの」「知識の発達に及ぼす影響を測定しているもの」「性格の発達に及ぼす影響を測定しているもの」の三つに分類し、知能及び知識に関する研究では促進的効果を立証しているものが多いが、性格を扱ったものは研究自体が少なすぎることを指摘し、全体として保育効果に関する科学的根拠の獲得に不十分であったことを反省して科学的基礎づけに努力する必要を強調している。^③

わが国幼稚園の過去をふりかえるとき、保育効果立証の試みの多くが、幼稚園という存在自体を価値づけ、一般社会に幼稚園の必要性を認識させることを目的としてなされていることに気がかされる。

明治末期から大正年代の幼児教育誌上に現われた保育効果論は、幼稚園の立場から、幼稚園が幼児の生活にとっていかに適しい場であるかを、意見として述べたものが多く、その効果を次のような点

に求めている。すなわち

① 幼児の生活態度を向上させる。② 社会性を発達させる。③ 中間学校として小学校への橋渡しの役目をし、入学後の適応を容易にする。④ 家庭では与え得ない多様な経験を提供し得る。⑤ 家庭では把握し得ない幼児の能力・個性を知り得る。

などである。明治末期に幼稚園に対する攻撃が「家庭教育を破壊する」との見地からなされたため、それに応えようと意図したのであろう。

実証的な研究としては、入学後の学業成績・身体測定の結果を比較したものが幾つかみられる。これらの試みは、学業成績とか、身長・体重の計測結果などが、客観的資料として得やすいものであったこと、及び、幼児の知的発達の促進を園に対して望む一般の要請に応えようとしたことを、物語るものと思われる。「幼稚園へ入れたからには入学後の成績がよくなっては意味がない」とする、一般の声はかなり強かったものようである。

昭和以降の「幼児の教育」誌上にみられる保育効果論は、それ以前とはかなり異った傾向のとりあげられ方をしている。すなわち、① 調査・観察などによって、実証的な資料を得、それによって効果を立証しようとしている。② 学業成績といったような特定の面からでなく、児童の発達の各々の面における保育経験児の特徴を把握しようとしている。③ 特に社会生活への適応が重視されている。

④ 優れた面だけでなく、欠陥をも明らかにしようとの意図がみられる。

る。

昭和十四年に東京市保育会が、小学校入学後の保育経験児に対して次のような項目に關しての調査をおこなった。^④

① 学習態度

- 一、注意力集中するか否か。
- 二、着眼点が良いか否か。
- 三、実行力があるか否か。
- 四、創作的であるか否か。
- 五、想像力があるか否か。
- 六、学習に興味があるか否か。

② 訓練方面

- 一、後始末をよくするか否か。
- 二、物を大事にするか否か。
- 三、自分のことは自分でするか否か。
- 四、友だちとの調和性があるか否か。

③ 体力・衛生方面

- 一、体力は強いかな否か。
- 二、衛生上よい習慣がついているかな否か。

これらを入学当初と一年後に調査し、幼稚園保育のあり方を反省すると同時に、小学校教育に対して幼稚園教育の立場からの要求をも呈出している。

これは、保育効果を測定することによって自分たちのおこなっている幼稚園保育を正しく評価し、更にそれを向上の資として活用しようとする態度の現れを意味するものであるが、それと同時に、保育効果というものに対して、ようやく明確な觀念が持たれはじめたことを示すものとして興味深く思われる。従来のいき方が、いたずらに既存の小学校教育形態の中で保育経験児の優越を立証しようとし、それによって保育の効果を主張することを試みたのに比し、幼

稚園保育の目指すものと、現存の小学校教育の形態にかなりのずれを發見し、幼稚園からみた「望ましい子ども」が必ずしも小学校における「よき生徒」となり得ないことに対して、小学校のあり方に問題を見出しているのである。これは、幼稚園関係者がかなり明確な形の保育目標という規準を持ち、それに従って自分たちの営みの効果を判断することに自信を持ちはじめた一つの現れとみてよいであらう。

保育効果を、保育終了後の経験効果、すなわち一種の残存効果として扱えようとする場合に、いたずらに現存の学校あるいは社会の形態の中で適応状態・優越性といった面からのみ、これを見ようとすることは無意味に思われる。幼稚園という施設で目標とした狙いが、どの程度達成され、それが後の生活にどのように影響しているかを究めることが必要なのではなからうか。

残存効果の研究と同時に、現在展開されつつある営みの効果を測定する試みが、保育の現場においては極めて重要性をもつものである。このような研究は比較的新しく試みられはじめている。保育者の受け持つ幼児数の多少が保育効果にいかの影響するかをみようとする研究、*⑤保育者の扱い方が幼児の社会性にどのように作用するかを知ろうとした研究、*⑥あるいは分団保育と一斉保育の効果を比較したもの*⑦などいずれもこの例である。

このようないき方は、保育効果を検討するという行為の持つ意味を、過去におけるそれとはますます異なったものとしていくであらう。

すなわち、過去においては、保育効果の研究は幼稚園という存在自体を意味づけることを中心課題となされてきた。それ故に、成長後の優越性を見出すことが狙いとされがちであり、必然的に残存効果の測定が中心となったのである。

しかし、幼稚園あるいは保育所における保育の自己評価という面に重みがるならば、測定は終了後を対象にすることにもまして、より以上現在を対象としてなされるわけである。そして、現在進行中の営みを対象としてさまざまな研究が数多くなされるならば、結果として「どのような保育が、最も効果的であるか」という現場の問いに対する答えが、自ら見出されてくるであらう。そしてそれは、保育の営みにおける最も重要な課題が解決へ近づいていくことを意味するのである。

*①山下俊郎：「保育効果に関する研究」幼児の教育48巻4号

*②大辞典：平凡社

*③山下俊郎：「同右」

*④東京市保育会：「幼稚園と尋常小学校との連絡に関する資料調査」

幼児の教育39巻10号

*⑤牛島義文・星美智子：「保育所最低基準に関する研究」幼児保育の研究。

愛育研究所編：金子書房

*⑥佐久間信子：「幼稚園における保育態度と幼児の社会性との関係」

児童理解の方法 松村康平編：誠信書房

*⑦東京都保育会研究委員会：「分団保育の実態調査」 幼児の教育48巻1号。